

違いを力に

発達障害をめぐる現場から

会話がかみ合わなかったり落ち着きがなかったりと、「困った子」扱いの要因になる発達障害の特性。克服には、周りの適切な支援や環境づくりが必要だ。その手法は、子どもの健全育成や若者の自立、仕事の創出方法にいたるまで、近年の社会問題に解決の糸口を提示する。第3部では、多彩な現場で活躍する支援者たちを紹介する。

■運動の可能性

「すごい！ できたやん 己評価」を育み、生きる力！。山下耕太君(6) 〓 仮名の源になる」と話す。名〓は8月末、「絶対できへん」と言っていた倒立が初めてでき、周りの祝福を受けながら、自身も驚いた様子だった。

NPO法人チットチャット(大阪市中央区)では、簡単な遊具を使った運動で発達障害児たちの力を引き出す。大阪市の障害者スポーツセンター勤務を経て独立した森嶋勉理事長(47)は「『できた感』を無限に得られるのが運動。それが積

み重なって自己肯定感(自己評価)を育み、生きる力になる」と話す。運動が体に及ぼす仕組みについて、同法人の活動に協力する姫路獨協大作業療法学科の太田篤志教授(42)は、環境とうまくかかわるための機能「感覚統合」の過程から読み解く。子どもは運動の中で、体

第3部 支援者たちの様相

(1)



運動で発達障害児らの力を引き出す森嶋理事長

のバランスや筋肉の動き、これらの調整がうまくいか皮膚への刺激といった感覚情報「処理」し、周囲への働き掛けを自分なりに組み立てて実行する。

■枠組み超えて

感覚統合には、一人一人の特性に応じた対応が必要で、指導者の力量が問われる。森嶋理事長が指導法の根本に据えているのが「コースティングの考え方」だ。美智代・Esprit代表(45)〓同市淀川区〓は「パライム(価値観の枠組み)を外すのが鍵」と指摘。手が「自分の能力はこまで」ととらわれている枠を克服する面白みをいか

たための土台になる」と太田教授は話す。ここで培われる力は「人間や社会とかかわっていく」程の「交通整理」を行う。ここでも求められる力は「人間の特性に応じた対応が必要で、指導者の力量が問われる。森嶋理事長が指導法の根本に据えているのが「コースティングの考え方」だ。美智代・Esprit代表(45)〓同市淀川区〓は「パライム(価値観の枠組み)を外すのが鍵」と指摘。手が「自分の能力はこまで」ととらわれている枠を克服する面白みをいかして取り払い、やりたいことや実現に向けた手段を自ら編み出すよう導く。「スポーツに限らず、企業や教育、子育てにも応用できる」とし、同法人の手法に注目する。森嶋理事長の場合、まず「相手の行動を徹底的に受業」で、子どもの成長に必要な感覚統合の力が抜け落ちかねないと懸念。「子どもたちが自ら築く遊び文化、それを育む保育環境が今、求められている」と訴える。

実カプラス1で成長遊び文化自ら築く環境を

必要な感覚統合の力が抜け落ちかねないと懸念。「子どもたちが自ら築く遊び文化、それを育む保育環境が今、求められている」と訴える。